

書いたこと書かなかったこと : 室鳩巢の写本と刊本

白石, 良夫

<https://doi.org/10.15017/4741964>

出版情報 : 雅俗. 9, pp.16-29, 2002-01-30. 雅俗の会
バージョン :
権利関係 :



書いたこと書かなかったこと

白石良夫

——室鳩巢の写本と刊本——

一 刊本『明君家訓』とその草稿本

室鳩巢が加賀藩の弟子にあてた書簡（享保六年一〇月一九日付）に、つぎのような一節がある。

明君家訓、比日楠諸士教と改名、私序をも加、且又末に此度調遣候跋語をも附候て新に仕直し申候。尤板は旧板を用候て少宛相違の処は埋木を致し改申候。火葬の一段も此度加へ申候。すぎと原本の通に罷成申候。

（『兼山秘策』所収）

『明君家訓』は、正徳五年に京都の茨城多左衛門（柳枝軒）から出版された。内容は、主君が家臣にむかって武士としての心得を述べたものである。よく読まれ、後

世、おおくの大名家の家訓に影響をあたえた。

享保六年に再刷りされ、おりからの改革政治に乗じて書名の「明君」が將軍吉宗だと取り沙汰されたり、柳枝軒が水戸藩と係わりふかったことから光圀の著作だといわれたり、また井沢蟠龍の『武士訓』の付録だったところから蟠龍自身の作だとされたりして、注目された。

だが、実際は室鳩巢の著作であったこと、享保六年五月から一〇月にかけての『兼山秘策』所収鳩巢書簡によってうかがい知ることができ、ことの詳細は、すでに報告したところである（『江戸時代学芸史論考』所収「井沢蟠龍著述覚書」）。

右引用部分は、書肆の要求に応じて、著者として名前

をあきらかにし、書名をもとの「楠諸士教」に復し、ついでに序文と跋文も付した新版をだす目論見のあることを語っている。版は全面的に彫りかえるのではなくて、埋木でもって補修する。ただし、火葬に関する一文は、どうしても加えたい。それによって、原本のとおりになるという。本書の原本（草稿本）には「火葬の一段」があったといい、だが、著者の意に反して刊本では省かれた。その草稿本といわれるものが、武士道全書に翻刻されている。問題の部分は、草稿本でつぎのようになっている。父母・兄弟・妻子等死去いたし候節、葬送の礼法、古の聖人定置給へりといへども、今急に難取行候。追て宜く相計ひ可申出候。先其内寺僧頼候とも、火葬停止に候間、其旨急度相守り、誰によらず死去仕候はゞ、一統に土葬に取置可申候。若相背き候者有之候はゞ、急度可申付候。

右の傍線部が、刊本では省かれているのである。

この草稿本そのものは未見であるが、武士道全書活字本によれば、内題には「仮設楠正成下諸士教二十箇条」とある。鳩巢の序文が付され、序題が「楠正成下諸士教」、

その一節に書名の由来を書きつける。

仮設^{かりもふく}する楠正成下諸士教と名付ける事は、かゝる物有と聞も及ばねども、下として上に代らん事は其縁^{みづか}なくてははゞかりあり。昔より本朝にて人の上に居てさるあらまし心得る人は、正成なりけんかし。されば正成が所作をこゝに仮設て、筆端を記す便りとすといふ意なり。（後略）

あの楠木正成に、かかる著作があったわけではない、だが、かかる教訓を、無名の士が明君になりかわって垂れるには、それ相応の人物が語ったという設定が必要で、それにふさわしいのが楠木正成公である、よって、かりに正成の言説として、わたしの思うところを述べるのだ、と序文の筆者は言うのである。「元禄五年正月十三日室直清師礼父識」と文末に明記されたこの序文は、楠公著作として世にでまわる偽書のためではない、著作者はまさにこのわたくし室鳩巢である、ということの証文である。

「元禄五年」が正しければ、このとき鳩巢三五歳、身分はいつかいの加賀藩士であった。それから二十数年後

の正徳五年、「明君家訓」と題して出版されたとき、鳩巢は幕府の儒官となっていた。だが、この出版物の著者は不明ということになっており、そして、原著にあった一文が削られていた。弟子にあてた前掲の鳩巢書簡によれば、版元は著者が鳩巢であったことを初め知らなかったかのごとくであるが、そのあたりの真相は分からない。知っていても知らなくても、本書出版のセールスポイントは、幕藩体制下の明君の教訓というところにあるのだから、話題はアップトゥデートでなくてはならない。「先其内寺僧頼候とも、火葬停止に候間、其旨急度相守り、誰によらず死去仕候はゞ、一統に土葬に取置可申候。若相背き候者有之候はゞ、急度可申付候」という一節は、どうあっても、徳川時代の現代の話にはならない。刊本でこの一段が省かれることになったのは、当然といえは当然であった。

しかしながら、著者である鳩巢の本書執筆の意図は、また別のところにあった。鳩巢は、正成に「火葬停止に候間」と言わせている。違反する者があればきつく申し付ける、とも言わせている。建武中興時代あるいは南北

朝時代に火葬禁止令がでたのか、鳩巢はしるべき史的根拠をもつてそう叙述したのか。だが、室鳩巢は歴史家ではない。だから、史実かどうかには、鳩巢は関心をもっていない。儒教思想家である鳩巢は、楠木正成に仮託することによって、儒教式の葬礼を主張しようとしたのである。

鳩巢にとって処女作である『楠正成下諸士教』は、楠木正成のものでもなく時流にのつたものでもない、思想家室鳩巢の思想的著作であるのだということを、草稿本の序文ではっきりと明言している。著者名を伏せて出版されたことは、鳩巢の本意ではなかったはずである。したがって、再版にあたって著者名をだすからには、楠木正成の名を冠した書名、初版本で省かれた一段、そして著作の意図をしるした序文、これだけはぜひとも必要であったのである。

もっとも、この新版は、おりからの出版統制令に抵触するところがあつて実現しなかった。のち、内題だけ「楠諸士教」と改めた本が出ているのだが、著者の鳩巢とはまったく係わりがない。版木を流用した、またしても書肆の勝手な所業であった。このことも前掲拙稿にふ

れておいた。

二 刊本の中の松平伊豆守

室鳩巢の代表的著述『駿台雜話』巻四「大仏の銭」は、松平伊豆守信綱の善政をかぞえあげて、「天下後世において大功徳ありといふべし」と持ち上げる。もっとも、三代家光・四代家綱の時代においては、伊豆守にかぎらず、いずれの執政家も「至公至明」であったのだ、と鳩巢は言う。つゆほどの私心なく、正道をもって政務を遂行したから、諸侯諸役人の身持ちも正しかった。しかも才智をもって人をあなどらず、権力をもって人をおさえつかなかったので、諸役人も執政家にははかることなく、徳川家のためまた天下のために、遠慮なくものを言った。なかでも伊豆守は「世にたぐひなき」人物だったと言って、以下の挿話を紹介する。

当時、幕府の役人に井上新左衛門という者がおり、伊豆守のお気にいりであった。この新左衛門、はなはだ諧謔をこのんだ。あるとき、鱈たらの献上があつて、それを將軍に披露するというので伊豆守が検分したところ、鱈に

塵がついていた。伊豆守は係のものを叱りつけた。すると、かたわらにいた新左衛門が、

「いや、鱈には塵があるものです」

と言った。伊豆守が「いかに」と問うと、

「三番叟に、ちりやたらりと申すではありませんか」

三番叟の詞章「ちりやたらりたりら」に洒落で言った。伊豆守はそれを聞いて笑いながら機嫌をなおし、

「とかくものごとに念が入っていないからだ。なにことも念を入れるにこしたことはない」

「おのおの様には御念の入ったほうがよろしい。が、われらがごとき輕輩のものは、あまり念をいれると、かえって悪いこともあります」

「念を入れて悪いことがあるか」

と伊豆守が言うと、新左衛門は、つぎのような話をした。むかし、玄宗皇帝が方士に命じて楊貴妃のありかを尋ねることがあった。方士は、蓬萊宮に到って楊貴妃に会った。貴妃に会ったことを報告するために、方士がその証拠の品を要求したので、貴妃は玉の簪をあてえた。ところが、これはどこにでもあるものだといふので、あまり

に念をいれすぎて、しいて玄宗との密語を聞きだした。

帰って報告すると、はじめそれで済んだのだが、玄宗がつらつら思うに、この密語は貴妃とわれ以外に知るものなし、それをかの方士が知っているというのは、さてはやつめ、貴妃と通じたな。というので、方士を殺してしまつた。

「玉の簪だけでよかつたものを、あまり念を入れすぎて、かくのごとであります」

また新左衛門がおどけを言つたというので、一座は面白がつて、その場はすんだ。

その後、天草の乱がおこる。伊豆守が派遣され、賊徒を平定して江戸に凱旋した。旅装のまま江戸城に登城したが、そのとき在城の面々はのこらず迎えにでた。そのなかに新左衛門を見つけた伊豆守は、

「そちに話したいことがある。將軍にお目通りしたあと」

と言つて待たせておいた。やがて退出した伊豆守は、そこにいあわせた者たちを集めて話しはじめた。

天草の作戦会議で、諸侯の軍でいっせいに敵城に攻め

こもうということに決して、そのときはわが本陣で、それがしが鐘をつき、それを合図に全軍集合というふうに合議した。だが、よく考えてみるに、今夜にでも、敵方の者か、あるいはどんな馬鹿者かが、忍び入つて鐘をつかないともかぎらない。それではわが軍を誤ることとなる。というので、撞木をそれがしのそばに置いておいた。だが、また思ひに、鐘はなにも撞木でつくとはかぎらない、鉄砲の台尻かなにかでもつけるものだ。そこで、鐘を地上におろし、薦でもつてそれを巻いておいた。そんなことをしているうちに敵が攻めきたつて、にわかに合戦になつたので、それ鐘をつけたが、上に釣りあげて薦をとくの手に間どつて、鐘をつくことなく、なんとか敵を退散させた。

「そちがいつぞや申した方士蓬萊宮の物語は、このようなことをいうのだと、そのとき思い當つた」

と伊豆守は言つた。

『駿台雑話』は寛延三年、江戸の前川六左衛門から刊行され、その達意の文章と穩健な教訓とで刷りをかさねよく読まれた。

三 写本の中の松平伊豆守

ところで、みぎの松平伊豆守と井上新左衛門の逸話は、鳩巢がだれか（新井白石か）から聞いたことであつた。面白くまた為にもなるので、鳩巢は加賀藩の弟子に、かつて手紙でかたつて聞かせたことがあつた。その書簡が『鳩巢小説』に収められている。逸話の内容は変わらな

『鳩巢小説』

其後、天草の事起り候て、伊豆守殿を被遣候。天草仕舞被申候て被罷帰、すぐに登城の時分、右新左衛門を始、大勢御城にて迎に出候て、「無事に御仕廻被成御帰、目出度」由申候節、伊豆守殿被申候は、「新左に咄申度事有之候。只今御前へ罷出候間、退出之時分咄可申候間、夫迄是に待被申候へ」とて御前へ出被申候。やゝあつて御前より出被申時、新左衛門待居申所にて着座被致候て、「御近習之衆中、皆々是へ御出候へ」とて大勢の中にて、伊豆守殿被申候は、「新左、此已前、楊貴妃の謡を引て、念入

いが、『鳩巢小説』のほうは手紙のおもかげをそのままに残しており、『駿台雑話』は最初から出版を意図した随筆であるから、とうぜん文章とストーリーの細部は整理されている。いま全文を比較するゆとりがないので、逸話のさわり部分、天草の乱から帰つて伊豆守がかたるところを掲出してみる。

『駿台雑話』

其後、天草の事出来て、伊豆守奉^レ命てゆかれしが、不日に賊みな伏^レ誅て江戸へ帰着せられしに、旅装のまゝ直に登城ありしかば、折ふし在城の面々、残らず迎勞しけり。新左衛門も衆中にありけるを、伊豆守はやく見つけて、「そこに語る事こそあれ。今御前より罷りて」とて、御前へ出られ、さてやゝしばらくありて、御前より退かれ、衆中にていはれしは、

たるは悪敷と被申事、覚被申候哉」と被申候故、新左衛門、「いかさま左様の事も有之様に覚候」由申候。

其時、伊豆守被申候は、「此度、天草にて、其儀を存出候て、新左被申候事、尤と氣付申事有之候。先天草へ罷越、惣軍へ申談候は、「我等陣所を本陣と定め申候間、人数を出候か又は急成事有之時分は、つきかね我等陣にて撞可申候間、相図に惣軍出し被申様に」と申合、扱大成鐘を取寄、陣所につり置候。其後に存候は、何様の破家者候てつき申間敷ものに無之、其上、敵方より忍のものと入候てつき申べきも難計候。左候へば、大成さわぎに可罷成と存候て、しもくを我等枕本へ取寄置候。又存候は、必しもしもくばかりにてつき可申にても無之候。鉄砲の台すへなどにててもつき申儀も可有かと存候て、中々氣遣にて、暫も氣休不申故、翌日申付候て、鐘の上をこもにて厚くまかせ置申候。何事ぞと申時分は、こもを切すて申事はやすく、手間も不入事と存候て、左様に致置候へ共、又存候は、こもを切ほどき候て

「此たび天草にて、諸侯一度に賊壘へ向ふべしと約束定りて、さておしよする時は、某が本陣にて、鐘を撞べし。それを相図に諸手の衆あつまるべしといひ合せて、

僉議の間日を経けるが、某おもふには、今夜にても賊方の者か、又は馬鹿ものありて、忍び入て、鐘を撞て我衆を誤る事もあらむかと、

撞木を取よせて我側に置けるが、又おもふには、必撞木にも限るべからず。

鉄砲やうのものにても撞まじきにもあらずと、

つき申者有之間敷とも不被存、とかく鐘を地へをろし候て、釣索を長く致置、急なる時は即時に釣上申様可仕と存候間、右こもにて巻申、鐘を地へおろし置申候。其以後、果して城中より夜打を打申故、「それ、鐘つき申候へ」と申時に、俄になわを切とき候へ共、急にとけ不申、漸々とき候て上へ釣あげ申候内に、敵は城中へ引申候。爰にて、余り念入候て害に成申儀をよく合点いたし、新左被申候を幾度か存出し申候」由。

刊本の文章には出版のための整理の手が、あきらかに入っており、達意という点ではそちらのほうに軍配をあげるべきであろう。教訓のために用意された寓話であり、叙述の重複しそうなところは思い切つてカットし、繁雑さを避けて筋を単純化し、肝腎の教訓との接点をはっきりさせる。それにひきかえ、『鳩巢小説』は、ストーリーのある物語を候文で書いたものであり、しかも手紙の常として推敲の時間はあたえられない。そうであるとかく冗長になるかと思わせる典型例である。

鐘を地へおろさせ、こもにて巻て置せたり。

然る所に賊徒挑戦つて、思ひよらず俄に手合せありければ、さらば鐘を撞べしといふに、上へ釣あげこもをとく程に、つひにまにあはずして、たゞかゝりに懸りて攻潰しけり。其時かのいっぞや申されし、方士蓬萊宮の物語は、かやうの事にこそと、その事を思ひ出せし」とありしとなり。

だがしかし、臨場感では、『鳩巢小説』のほうに一日の長がある。なぜなら、『鳩巢小説』は、手紙形式の説話ではなく、実際の手紙そのものだからである。いささか読みづらいのは事実だが、読みやすく整理された文章より、語りの息吹がつたわってくるのも事実である。

四 写本だからもらした本音

そして、語りの息吹がつたわって、ついでに鳩巢の本音もつたわってくるのが、じつは『鳩巢小説』であった。

言い換えれば、『駿台雑話』は、文章を整理しただけでなく、鳩巢の思想的立場をも整理してしまつたきらいがある。

松平伊豆守と井上新左衛門のいくつかの逸話を記したあと、『駿台雑話』では、鳩巢は、つぎのような批評をする。

これ戯れに近き物語なれども、伊豆守、理にさしく人の言をすてず、それにたゞ今馬よりおり、御前へ出て天草の首尾を申上らるゝ折ふし、常人ならば中／＼おもひもつけじ。たとひ思ひつくと、此節はさてやむべき事なるを、只常の気色にて、稠人広座の中ともいはず、我あやまちたりし事をも有のまゝに語られしにぞ、伊豆守の心公にして、器量の大きなるもしられける。世に古今の良相とするも、げに理りと覚ゆるぞかし。是をもて見るに、世の權威にはこり、辺幅を脩る人は、誠に馬援がいゆる井底の蛙也。嗚呼いやしいかな。

満座のなかで「我あやまちたりし事」をかたつた伊豆守の度量の広さを言い、さすが知恵伊豆、「古今の良相」

と評判をとるのも尤もなことである、と鳩巢はこの逸話の最後をむすんで、伊豆守の「至公至明」な政治家としての資質を称賛した。老中・若年寄を中心とした閣僚による幕府政治のシステムは、この伊豆守の時代に確立された。鳩巢の目から見れば、この時代は幕閣草創期である。八代将軍時代の朱子学者鳩巢は、あるべき政治家像を、この時代の執政家、なかでも松平伊豆守に見ていた。というふうに、このエピソードは読まなければならない。だが、ほんとうに、鳩巢はこの逸話をそんなふうに読んでほしかったのか。これはわたしの主観であるが、みぎのような評言は、教訓としては毒にも薬にもならないような気がするのだが、いかがであろうか。ここに、『鳩巢小説』のほうに鳩巢の語りの息吹がつたわり、ついでに鳩巢の本音もつたわつてくると言つた所以がある。すなわち、『鳩巢小説』では、伊豆守・新左衛門の話を、こう総括する。

其時、何も、伊豆守殿、己が天草にて自分のしそこなひの儀をかくされずして、新左衛門が善をおほひ不被申儀を感申候。其上、天草よりの馬おり（旅を

おえたそのとき）に御城にて新左衛門に逢被申、はや此儀被申出候事、伊豆守殿器量有之、快豁なる所相知申候。

但、治世に天下を治る儀は得手物にて、軍は不得手と被存候。兵は神速を第一に仕る物に候。釣鐘の事、まはり遠に聞へ申候。日頃御仕置の手際とは各別違申候。入ては相、出ては將の材、無之かと存候。

井上新左衛門事、只今跡絶申候。伊豆守殿に右之様成おどけを申儀、たゞ人にては無之候。

「伊豆守殿器量有之、快豁なる所相知申候」までは、『駿台雑話』の評価と変わらない。そして、『駿台雑話』はそこで終わっている。教訓隨筆として伊豆守を持ち上げたところで終わっているのである。だがしかし、『鳩巢小説』は、それだけでは終わらない。伊豆守を持ち上げて、つぎの段で一転して「但^{ただし}」と言う。

鳩巢は言う。ただし、松平伊豆守殿は、平時に天下を治めるのは得意とするところだが、兵法は苦手とお見受けもする。天草でのこと、兵を用いるは神速を要するのが戦の道であるのに（魏志郭嘉伝「兵貴^二神速^一」）、

釣り鐘の一件はあまりにもまわりどおいことである。戦というものは、日常の政務の手腕とはまた格段にちがうものである。内にあつては良相、外にあつては良将などという人材は、なかなかいないものなのだ、と。

伊豆守を「古今の良相」とする世評に、鳩巢も異はとなえない。「良相」だが「將の材」ではないというのが、鳩巢がくだす、伊豆守への偽らざる評価であつた。弟子への手紙ではそれを憚ることなく言つたのだが（言えたのだが）、刊本『駿台雑話』では言わなかつた。『駿台雑話』の「大仏の銭」の段がそもそものことを言う話柄でないのは確かであるが、『鳩巢小説』でもらした本音が生かされていないのも、また確かである。

そして、この説話の最後に、井上新左衛門を「たゞ人にては無之候」と言う。『鳩巢小説』のこの逸話が「井上新左衛門事、名譽の口きゝにて候」という一文で始まるということを考えると、鳩巢が褒めたかったのは、松平伊豆守ではなくて、じつは井上新左衛門のほうであつた、ということが判明するのである。

五 『鳩巢小説』とは何か

冒頭でふれた『兼山秘策』は、室鳩巢の著作とされる
ことがよくある。最初の活字本、日本経済叢書本など、
はつきりと「室鳩巢著」と明記する。だが、それは正確
ではない。加賀藩江戸屋敷や幕府儒官室鳩巢たちから同
藩士青地兼山・浚新兄弟らのもとに届いた書簡を、この
兄弟が共同で抜き書きしたものである。書簡発信者たち
のうちでもっとも知名度のあるのが鳩巢で、しかも鳩巢
からの書簡がもっとも多い。そこから、鳩巢の著作のこ
とくに見られるのである。

鳩巢らは、加賀藩勤務の侍にどのような内容を書きお
くっていたのか。それは、青地兄弟が抜き書きしてつけ
た書名、「秘策」がその体をよく表している。鳩巢らが
幕府内などで知りえた政治むきの話題、幕府や諸藩の極
秘・機密に属するようなことがらである。その中身は、
じつに仔細である。そして、あたかも事務連絡のごとく、
長期間にわたって定期的な、しかも複数の人物から、幕
府・諸藩の政治情勢が報告されている。

鳩巢のごとき、幕府の中枢にいた人物だからこそ知り
える内容で、それゆえ享保改革の一級資料と位置づけさ
れるのも納得されるのだが、では、そういった人物がそ
のようなことを特定の大名家の家臣に知らせることは、
許されたのか。この『兼山秘策』にはかなりの転写本が
あり、「秘策」といいながら、よく知られた書物であつ
たことがうかがえる。鳩巢らが頻繁に幕府の情報を流し
ていた、その事実が白日のもとにさらされているのだが、
かれらが機密漏洩の罪で告発されたなどということは、
寡聞にして知らない。

詳細はちかく出版予定の拙著『鳩巢小説を読む』（仮
題）で述べるつもりであるが、じつは鳩巢らから大量に
とどく書簡は、藩士である青地兄弟らを窓口にした加賀
藩の、藩政レベルでの情報収集活動の一環であった。そ
ういったことは、加賀藩だけがやっていたのではなく、
ほかの大名家もおこなっていた。であるから、『兼山秘
策』を転写することも、また立派な情報収集活動であつ
た。そして、幕府はそういった情報を大名家に管理させ
ていたのである。

ところで、江戸の鳩巣から送られる情報は、加賀藩当局が必要としているものばかりとはかぎらない。いかに未知の新情報だとしても、たとえば戦国時代の話というのでは、現実政治の情報としては意味をもたない。そこで、記事の内容によって選別する。幕府や他藩との外交に役だちそうな情報を、『兼山秘策』に入れてゆくのである。そして、戦国時代や幕初期の話のようなものを取り残される。役にたたない情報だが、捨てるには勿体ない、そんな話をべつに取っておいた、そのとっておきの話の集まったのが、『鳩巣小説』なのである。

六 忠直卿をめぐる刊本・写本

菊池寛の小説「忠直卿行状記」で有名な松平忠直は、家康の第二子秀康の長男である。慶長一二年、父の死によって福井六七万石を襲封した。忠直は、その治世の初期においては人望もあったが、大坂の役に出陣して華々しい戦功をあげたにもかかわらず、期待したような恩賞にあずからなかったため、將軍家に不満をいだくようになる。家康没後は江戸への参勤をおこたって、二代秀忠

將軍にたいして不遜の態度をとり、領国経営にも支障をきたした。家臣や領民にたいして凶暴なふるまいが絶えないという、よからぬ噂も幕府に聞こえてくる。

忠直の不行状には、大坂の役での論功行賞にくわえて、父の代の宗家相続のいきさつを引きづっていたという説がある。あのとき年長の父が宗家を継いでおれば、自分が將軍である。父の武功は論をまたず、自分も大坂の役では大坂城一番乗り、あの真田幸村をやぶった。それにひきかえ、秀忠にはさしたる戦功もない。それどころか、関ヶ原のときには因縁の幸村軍に翻弄され、戦場に遅参するという大失態をしでかした。それがいまでは將軍である。忠直の心中、察するにあまりあるとともに、秀忠にとつては、これもちだされるのは、じつに嫌であつたろう。おまけに、忠直の正室は、秀忠の娘、勝姫である。つまり、將軍秀忠にとつて忠直は、つねに負い目をもつ兄秀康の子であり、かわいい娘の婿であつた。

家康とちがつて慈悲ぶかいことで知られる秀忠としては、情において忍びないところである。ではあるが、こ

こでけじめをつけなければ、諸大名に示しがつかない。

徳川の体制もじゅうぶんに固まったとはいえない今、天下を統べる二代目としては、私情に流されて身内にあまくすることは、だんじて許されなかった。元和九年、秀忠は忠直に改易を命じ、豊後国萩原に配流した。

といったところが、歴史教科書的な松平忠直の生涯である。家臣や領民にたいして凶暴であったという説は、鳩巢の時代すでに知られていた史実であって、『駿台雑話』巻三「杉田老岐」は、それが自明のこととして書かれた一文である。

あるとき、主君忠直が鷹狩から帰って、出迎えた家老たちにむかって、本日の供侍たちのはたらきを褒めた。「万一の事ありて出陣すとも、上の御用にもたつべしと覚ゆるぞかし」と言ってすこぶる上機嫌であった。家老らは「御家のためなにより目出度御事にて候」などと齒の浮くようなおべんちゃらを言う。ところが、杉田老岐だけは黙っていた。杉田老岐はもと卑賤の身であったが、その才覚によって国家老に列するまでになった人物である。気になった忠直は、「老岐は何とおもふ」と言った。すると、老岐は口をひらいて諫言する。

「ただいまの御意、はばかりながら、嘆かわしいことと存じあげる。最近、侍どもが鷹狩などの御供をするにさいしては、行く先で殿の御手討ちにあわないとも限らないというので、妻子と暇乞いして出てくると承っております。かように主君をうとみ、主君のことに思い到らないようでは、万一のときの御用にたつとは考えられない。それをご存じもなく、頼もしく思われること、まことに愚かなことである」

忠直はいたく機嫌をそこね、その場で手討ちになる勢いであったが、老岐はそれでも諫言する。重臣どもは、その場をとり繕おうとしかしない。結局、忠直は不機嫌に奥に入ってしまった。その夜、老岐は、妻にわかれを告げ、切腹の用意をして君命のあるのを待っていた。やがて、登城あるべき達しがあって、主君の寝所におおされたが、忠直は、「昼間のそちのことが心にひつかかって眠れない。わしの誤りは明白である。そちの志をふかく感じてうれしく思う」と言って、佩刀を下賜した。老岐は感激落涙して退出した。

以上は『駿台雑話』の本文によって梗概した。おなじ

話は『鳩巢小説』にもある。例によって、刊本より冗長ではあるが臨場感があり、語りの息吹がつたわってくる。そして、これも例によって、この逸話にたいする鳩巢の評言に、刊本では言わなかったことが、写本ゆえに書かれている。

刊本『駿台雑話』の文末はこうである。

此事、翁（鳩巢）加賀にありし時、越前の人ありて語りしが、今おもへば此杉田などこそ、東照宮の仰られし「世に有がたき家老」といふべし。誠に一番鎗よりも難き事にあらんかし。

この逸話は、刊本では「杉田沓岐」という標題でかたられている。主人公は、つまり杉田沓岐である。だから、一命を賭して主君に諫言した杉田沓岐を最後に称賛するのは、当然といえば当然である。

ところが、写本では、鳩巢の言わんとするところはまったく異なる。曰く、

① か様之極勇の人（忠直をさす）も惻隠之心之掩ふべからざる事、又、臣忠義の感ずる所にて候歟。是程の人ながら、忠臣とはいへども、諸人の中にて申

たるが不屈き、又は事を他によせると被成候て、
② 沓岐を御にくしみ無之候か。

と。写本『鳩巢小説』は「越前の一伯忠直卿は、かくれも無之暴勇烈の君也」の一文で始まる。つまり、忠直卿の言行録として語られているのである。そのことを考えれば、最後はやはり忠直にたいする批評でなければならぬ。おなじ『鳩巢小説』でも異本の一本では、右引用の部分の初め（傍線部①）を「ケ様ノ暴悪ノ人」とするものあり、最後（傍線部②）を「沓岐ヲ御ニクミ無之ハ、流石東照宮ノ御子孫様等ト有之ト申候」とする（続史籍集覧本）。どちらが鳩巢の原簡に近いかは即断できないが、この逸話を手紙に記したときの鳩巢は、暴君という世評のある忠直にたいして同情的であった、そのことは確かである。